



折鶴
金田

あはれ... 句乃美を述べて
新の... 平...
木の枝も目をやみ...
... 徳に神に祈り
... 事...
... ありか...
... 無...
可憐いぬ



平橋庵



お露に... 雲の風 敲氷
枝之... 葉に松 花音
... 戸... 湯... 升呂
... 桃灯... 乙氏
... 花... 杜棠
... 春夕
... 守り神 之花

此度の除目きたれを除目あり 長瓜

遠見えつて新め序 達 百鳥

さ禱と破しうらぬ草蒲賣 仙舟

しりさうあるま宵乃結橋 茂林

いづあつ秋のうちうら葉のふ 喜湖

むくまきまふり明の影 亭午

佐度一角力用さ何ふて 眉長

飯登の斬と世の八重世月 泣柳

削れを落さ指藉のこあらは 兀費

裡海ありふ地乃何さう 青羊

弁天に啼るるを昆毘ふ似て 五原

やーとま夏のえてお明る 少朝

いらしてしうらむさうる出 商 鳥橋

かーとわらうさうー何ふ猪 仙舟

行燈の甚むふ尔ま後得ふ乃草 巴东

か散の荷を何る 猪々猪 猪猪

籍波より人しよ〜入交

古椿

梵海の牙あれそ宿も定ぬ

孤造

一ど〜て名よあけふ包法

古川

るの内札に汁乃印功

勇記

坂を月照れと流流も夕時

并柯

あふ大繩を穿〜も用心

漢十

大切を備旨と習所おも骨柳文

永秋

法をゆふさぬむ〜は極味嚼

慕仙

三

と尋の〜ちた如実〜後後と

翠葉

使〜もそよかりとらて照礼

枝流

幾も長もを本れ花の枝母〜

洞流

たちり〜れと伸る日乃乾

孤石

尚菫の〜まよ〜しお書〜ま〜

やんあ〜あま〜人の〜と〜具〜

唐土にいまも思ひ申由ふ天を——めて
行ひたやましくわき貞観安和天照此
以中——まきまおま——ひひりて程ほ
むの七世を担い——よ——古き文に
み——るを僕もまおれよあまらん
とにまわら程とらふむい——むのら
い波乃——の意と文其六のせておすん
——孫長等こまな——るおとら
あかたら——

お梅やうらく
守茂

——くも神のま
月に栖む
うちほむ
宗澄

さ——くらすよ記
厚く縁を秋風示乃
貞徳

琴初うま
地まうらま本の宵れ
李吟

花のみやぶる

重屏乃松の

七世伝

古きよき木とて

松も友非し

麦林

友あり夕納涼

歌にも重あはし

柳居

波ありれり草橋

甲斐守のあふぬ波にこそち孫の母しとわを
 懐く人まのわつきりも床を枕にゆきまの
 きまきあき方なもて席をわくめちと英意心
 松にこそわくまきしと老翁のいふけあはれ
 中へ母の齡やそちのふてけりてふまを
 さんともあふぬ思ふも世に世に詞をとてけり
 奈洞正ふふ葉から

撰りて母の杖

七十歳 首領の意

天明三癸卯柴草甚白

あしき徳好士よるを悪まじふる
あしきふの音白うの音あまの音
あしきを悪者の屏風よきふんをて
元懐あしきふ

解興

仙人の傳くは種も極乃苑	車更	嚙白
今もあせぬ多れさへはけり	詭水	
あしき滝を現にあしきみて	仙鳥	
詭水けよを詭水をくろく	詭水	
あしきあし朝露の好ま井掛ひ	詭水	
詭水のあしきに埃れめあしき	詭水	

ウ

名月にやそみきせめて初乃白

左城

山の舟きれ中へ條村

春河

あな乃船吹流すを笑とそや

花六

医者もを医者もすの浪笠

渭川

さしあに雲集て茶乃摺古

九河

塙き師を志らぬ蟹昌

蘭園

入舟の志者も唐乃そやり 唄

魚光

ふゆ越えぬ虎吹りけり

渭翠

白髪くま梳てわらをうたわれて

起子

控んで暮るに糸一か 誓

存吾

わの人多酒を茶よりあまのよる

秀介

たがひあつて 祈りする者

香源

寺の馬れ喚てそく居る茶葉庇

為雲

むくーとあーとある乳と分

風能

短衣の月に露とせめてまほひより

曲肘

妻を志すやう 廣の宵戸口

六和

調布の経緯の古くは縹ひの
 物やのりたる作者相分仰
 言やのりたる痺或は搔さる
 切梳みせり梳ひる古
 胡夕をからるは露のこま
 干縹乃縹乃縹乃縹
 桐筆

下略

四季の花名

東都

春を空から青くしてまじり春の雪
 むす一野やとちりは麻も油もけ
 必立や梅乃とにも花ひとけ
 梅くして春を隠す佛をま
 古の古の古の梅もつこころの古
 賞へ人も清く影あり砂松も
 朝露もくくはる多淋く春の秋
 夕暮も風流雲くして序なり

再謀
 子梁
 升海
 年家
 楚腕
 徐耳
 石計
 宅守

まよふ

おのれま

ぬれぬ

思本

賣

高村主

系齋



みよ〜聖をささぐけにま〜
 孫ん〜目の体〜ぬき〜
 掃〜〜さゆ〜人〜け〜る〜
 あり〜〜や〜代〜ま〜川〜
 直〜〜と〜乾〜ら〜ひ〜
 明方の神尻を〜〜
 高〜〜方〜その〜戸〜
 帆子〜〜
 初〜〜や〜一〜
 一〜あ〜よ〜木〜
 一〜
 一〜

臥床
 也崔
 南園
 信高
 完序
 龜石
 長谷
 海江
 高親

昔折をきくくぬ影あり葉のま
川きくくくくくくくくくくくく
まきくくくくくくくくくくくく
教入か一層のまきくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
まきくくくくくくくくくくくく
七野くくくくくくくくくくく
まきくくくくくくくくくくく

胡魚

燕雀

秋列

蓬羽

珠

様

大

赤楊

くくくくくくくくくくくく
むめくくくくくくくくくく
苗代か山嶺もてまきくく
まきくくくくくくくくくく

爰窺

泥尾

孤山

飛

陸奥國のまきくく

むくくくくくくくくくく

四鴉

孤石

梅さくやうくくくくく

まきくくくくくくくく

柳景

梅候や風も追ひつゝ百里香
啼き日暮る川音や花乃山
麓城を忍ぶ葉をりお神一これ
本渡のあてふまゝ一柳のふ
囁きお新のまゝやあゝおは
那のまゝおれ自ひまゝおは
疵痕乃酒湯と漬て楳のむ
秋の川や通るうらわに菫の自ひ
母を好むまゝおはけの秋涼一

乙河
左麦
仙香
女
素香
直衣
扇角
二石
飛六
又令

朽果ぬ毫の戸まゝ一又月も
まゝおはに花雪を忍ぶおは
口を積も忍ぶやあは乃夕これ
青は見え一夏はまゝおは初松矣
とあまゝの菴れ唐のあまゝこれ
透て耳の指おまゝやわらわら
折るておは授けまゝおはおは
父まゝやあまゝおはおは

志園
乙外
其音
おは
南里
白檀
女
花貞
并利

天白くおろし〜 秋月

素履

六〜 寺前を片隅や夏の夜

逸文

杖乃くしてあまうき起き 山路水

多々毛 秋瓜

紫陽花に花あまをくはきけり

少々毛 尺五

柳乃乃傳く海を〜 柳豆の事

凡々毛 礼竿

此のまゝに梅をいふ〜 綴月

白々毛 止弦

供の火にをさうりふ涼〜 なる

江々毛 草花

甲斐國

幾時かても回〜 五年 なる

五原

くくひまや一葉ノ啼て植乃なる

桂舟

あつて雪にやまむ柳〜 なる

十花

麻刈て隣〜 なる

斗十

々朝見れを只〜 や秋の音

孤道

一握矢更りれち産に 蔵〜 なる

古椿

三帯打て実もれ〜 ぬ乃花見か

巴東

小比危れほてち産中 産〜 なる

中郎

飛徳て居る多るわが形生言
 至根葉の枯れて移る様小
 を信乃目え——まわて葉落る子
 志くもや貢との様く向乃音
 珠較程てを北ま婦や川原と
 埋てやむ——を移る流白女
 神后や高き沖乃乃龍まら
 とくくと音れ中——新清水言
 馬橋
 下休
 知耳
 陽能
 宗水
 清秋
 花帝
 鴉路

豆弁や隣をわと負ぬ我
 月代のわいふもあつたき
 芥乃病癒しつたあつた
 まい深ぬぬまお其様もくま
 樽取て樽乃石を向の柳く
 川へ新流るの尾ま——の鳥
 か——まき世の新や枯宇
 古川
 平河
 乙苑
 北云
 重牙
 機志
 由古

能原

晴晴や浮きよのなほに雲とく杖
 来てき又なる忘れしる極の花
 歌歌中落ししもあらしは常れも
 場路や芥子ありしは清乃下
 野のそよぐやと源一やまきれ
 松杉戸城明ては奥あや極のふ
 まへて新巻の紙まきりしはれは
 案内にをくむ人や梅乃をさ
 山吹や庭まきりしきまのふ

素耕
 龜兼
 一才
 彦步
 山京
 小井
 系練
 清例
 梅香
 南松
 林秀

福徳に定の晴よまよと一舟
 布引乃海子積しふくまふを
 賞うて喜るまけなく晴まきり
 物望しむしひりしや中女ら花

世原
 素根
 仙秀
 女
 柳也
 仙休

双紙よま能友まよと一冬
 初雪や浮山まよと一冬
 春まよとまきりとおて見合小まきり
 吹れても勢うね歌や鶉歌を

荊原
 渭川
 九河
 蘭園
 魚光

いにしへの舞乃のやうなやうな

酒宴

あつたまゝらして佛やうな

希云

累さうな程ふやうな

美白

とてあつた程ふやうな

五言

近名早秋

あつたて秋をさうな

川蝶

河東

餅搦やとれと志那の荒男

左城

尾寺の男はあつたやあつた

雲飛

せうやあつた清な

花輪

和秀

あつたあつたあつた

西京

雲飛

あつたあつたあつた

馬水

和秀

あつたあつたあつた

梅林

あつたあつたあつた

二鳥

あつたあつたあつた

山神

柳卜

あつたあつたあつた

山神

江平

あつたあつたあつた

今鶴

陰後

托鉢の身をまらうに衣をい
乙黒 由和
其舟わらう船をさるる妙や厚乃舟
舟草
うとん登れ門叩くを平後此月
花木
寺のおきよ小菴に居れをいれい
似来
相油をて浸く衣をよ本音の詠
若義
振句ぬ歌芳一寺系福のう
春河

渥倉のう園めて

其ー一やを鳩此教や秋の声
芦仙

白ー世れ誠をいふに片ーる 成島 為電
古寺や秋の葉れ為ありき
女 女 女
静ふと厚くあ乃味も字指指選
女 女 女
娘姑唄れ能今ふ田種くの如
増坪 初重
うらひをやふも考らそ教の中
油川 雨洗
横形よ聲をさ述さり厚く松
栄車

清くうり三井とくゆりねやあきの月
酒田 市川
山吹甲質れまをそ花乃の庭
松遊

深くは解して庭を也遅 栂 共瓊
 葉肉のいふりあはれは年少 東原
 了るや懐せしまうは妻師を 凡信
 面を甲喰ぬ顔あり鳴子り 万葉
 角折ぬ床おれしより 楓 泉
 家園は春初る緑のまを木 朝陽
 空場を平信訪れし一昔のまを木 栂葉

可憐なる父のまうし——馬宗寺 福徳達 眉山

物もや弟の信よりと折らる 涼雨
 怖心物と孫をなすも子孫を心 似栂
 けしのもを言と後れ尼法師 杜例
 おあしは信れとも飽まらふのまら 江子 墨仙
 傘と干尻りともあはれ秋の光 初秀
 葉門子馬野をぬ 木橙 七覚 湖漣
 燈り燃るあゝるまゝくやまの峰 仲亮
 糸切のま守れ久しきまを木 柳尾 冬松

物も美れ入るも海一秋の風

可

竹枝辯

杖を毛をいして行て庭に居るおけ紳人達へ
おと園を獲ちてとちかふにいふまにれおとちか
かきつらめ整日者のるまき西照にふらりけき
おめま馬かおめまいひいひかちんり細お弁せん
いさおまおれいさおけいひおおんいはれけき
おとすけきお杖ちかすけきおおたおお杖

うさけお用いし杖とてお物おとて
おれおとれお杖とて杖とて杖とて
其杖とておおおれお杖とて杖とて杖とて
とて杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて
杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて
杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて
杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて杖とて

正徳五年正月一日

喜々々々々々々々々々々々々々々々

藏本 浮本

再後の田も何れも然地、のち
ふよ〜聖も一目に喜〜るありき
幸徳や一本と云ふを際〜られ
吹よせ〜しう〜たを生やるのむ
人よ〜六俄とれり少ぬきとる
奥千

夕影や花の奥もろ戸もさ〜
今とれま〜し〜と〜お〜し〜縁け
舞よ〜し〜あ〜る〜ぬ〜宿やあれ花
奥千

本〜ら〜や田守れぬの程も〜
不〜た〜又〜富〜も〜よ〜り〜さ〜
を〜の〜の〜ひ〜と〜ま〜す〜ら〜わ〜り〜も〜た
花よ〜ん〜
一連

昔明も火打れ言や〜と〜き〜
よ〜き〜の〜や〜何〜れ〜も〜え〜の〜あ
夕影やあ〜〜と〜ほ〜〜し〜ま〜埃
舟丁〜り〜ぬ〜ぬ〜ら〜き〜き〜
戸外

里府 魚重

沙流

凡友

丹素

奥千

宗明

何十

奥千

己長

少 形瑞

女 花よ

一連

五本

文杏

麻着

戸外

岸をりきよなるまゝあり

和格

早乙女は美人の如く小田の馬

一風

あはれや葉もいふ言の如く

言ふ

あはれや誰かかたの如く

喜荷

あはれや人ま車とてあり

起牛

松風乃外あ言ま神の如く

六和

あはれやうたのまの如く

存音

あはれや稲高の山に

西泉

あはれや那の母におろり

仙菜

あはれや名残の如く

詠而

東師の如く

道遠

あはれや淋しきうらみの如く

元貫

あはれや葉の色さ

女 栞兄

あはれやうらみの如く

風音

あはれやうらみの如く

如子

秋きて甲のおもしき冬瓜畑
鳥人乃初も見しきさくら梅
山吹や入りぬけしよかやふね
古道の跡を〜ふやせを堀
多形れて歌とふ〜り梅の家
ふまふ〜〜ゆひさか

松見

龜石

栗田

三浦

中野

田原

多ゆや碑り〜と伸〜まらぬ
啼〜いよ秋やあわぬ 語〜ま

壺中

酒唯

起身

稲後

ま〜きく〜を〜る〜り〜文〜記
梶乃〜を〜と〜せ〜て〜又〜る〜里〜々
源〜一〜平〜初〜忘〜れ〜一〜の〜方〜物
登州〜一〜字〜に〜す〜り〜む〜一〜の〜家
自〜家〜れ〜ま〜の〜〜一〜年〜わ〜り〜種〜々〜一
多〜籍〜も〜須〜戸〜此〜并〜寺〜氣〜足〜在〜り

和戸

池揚

吳山

陸波

春香

三穀

谷水

多晶松〜心〜わ〜り〜や〜昔〜屋〜々
川田 海香

帆柱の一舞休む乙多小
 霧乃れ雲物と見えくぬ葉小
 谷北戸を多のおお初小多る
 雲乃れと毎年子少や初松大
 山寺此海——くくはるま
 去者とも花多歌く牡丹多
 生千や多——はくあ日の白
 新地へと入るくかたは熱く
 雲
 松
 千
 山
 女
 市
 山
 松
 山
 女
 市
 山

柳さくやおてきれ町北貸る辰
 山吹や多ふく多る園りよ
 御示下りの隣お初や松月
 研おける刀すはく——くは秋
 江連縄のうかりや多れ花さり
 白彫とあかりくくく多る市芽小
 花さくや多松ひくくく初夏
 初春や多葉多まの晴さく
 初波のよひ多るくく初乙多
 辰
 松
 亭
 仙
 初
 松
 市
 山
 松
 山
 女
 市
 山

栲波平水ま稲垣にやあられ
枝少介昭好そまの栲波
栲波のそちわく除る柳水
在永 耶香 少年 山井

姫后合に角もかろき以地牛
中まれ信人そ此や蓮方む
半路 母必 栲波山 百雨

炭竈や神代れまのそ山
啼くら片まんで條るお糸山
八代 陶海 如牛

り秋平人初教乃 橋一与 丁和
只に終る事好くくと燈籠山 文沼
大東武家 宍のほやとみま一 青席
落る舞ふうそあひとるを神の西ま 喜夕
雪よまのそ身う給ふ 以平 古瓜
馬吹ふ谷物清まのそ片山 二宮 勇記
城と出るまのそわりまのそま田水 半路 池水

とらまへて見くそ栲波出の柳水 甲 吉峰

下終く——借くまらるや木の
 如くや深山遠く隔れと
 来て見れを又里のまじり
 隔ハや終よむ多き谷まじり
 去きと香の後れつ折う下
 法眼見をあてつ隔たりまじり
 冬秋のまじりつ折くまじり
 看終のまじりつ折くまじり
 名目や語よりまじりつ折くまじり

万俟
 如洗
 万幸
 之花
 巴图
 露殿
 秋江
 交明
 文瑞

庭子画懐

ま——まや甲の山とくまじり
 琪下

苗のまじり折まじりつ折くまじり
 折織わくまじりの初まじり
 園乃末まじりつ折くまじり
 御手洗まじりつ折くまじり
 衣やまじりつ折くまじり
 麻入くまじりつ折くまじり

黒沼
 桂園
 菅苗
 物如
 一合
 後石
 松秀
 和峻

口の底と時く入せる一とれか こゝろ 我者

あまのきりぎりす

御蔭れ礼も見せさる あまのきりぎりす 葡萄棚 苦寂

笈士れ又返る山れお葉く あまのきりぎりす 吟登

栞月より月のまきき栞野 あまのきりぎりす 利覚

まれおしむくぬ中より あまのきりぎりす 逸明

おみ解くふ あまのきりぎりす 彦信

空を流やと別尊留く あまのきりぎりす 堂春

おふれ能を伸 あまのきりぎりす 伴花

歌氣にを離れ あまのきりぎりす 吟朝

人の夜を あまのきりぎりす 吟暮

まれの あまのきりぎりす 吟之

初を あまのきりぎりす 太柳

り あまのきりぎりす 山花

年月や あまのきりぎりす 吉園

花も あまのきりぎりす 連園

花よりいもよみいしむ草葉集 作

仙五

歌よく歌りまかり遊む能く神

吟水

うつくしくと谷研きくらむ心

眉長

乳しと花あまうしと萩のむ

女 雲女

弱とわらむ海をみり初まり松守

田 一洞

い景の卯にみ出たりまらとく里

国分 宣奇

入おのまわりはらやみりむる心

琴粒

思ふくしく花屋へおとけり神花

松吟

苔まき細の花を川にわたりき

松吟 琴粒

柳花事花よりし柳子れくらまけり

石村 柳美

持橋くしくしき花をみりまの月

新巻 如志

虎魚の鱗くしくみゆる花葉集

山神 積鳥

隙をぬきとせむりえとくしと常重の

中長 波柳

名日中世細の生れくしくとく

中長 松篋

得定より入てゆりり宗古 多

山崎 永秋

霞編て歌くし集るを花の山

山崎 翠苑

日よれ源——くまてるりね
 とくくおろおろるるるるる
 日おろりおろるるるるるる
 ろろおろるるるるるるるる
 春風中車のふらふら丹波 口
 及向くをむてて——中る中る
 馬鹿や行て見れば陰も——
 茶畑も笑をこらふらおれ

杉原
 為仙
 何處
 渡十
 露雲
 平波
 李雲
 多風

高きま今河ア——立栗れ可
 此の所見くわ人多ふ十程く
 くらや波の都哉岩らや若屋も
 新母——まきまの力や小松川
 彼もまきまおろるるるるるる
 却生れ露くまきまのやり中る
 其れく傳くまきまの借やまのこ
 塘もまきまの探ふりや角力も
 又月もや晴る若らもまきまの雪

桂節
 松祖
 其通
 求古
 河水
 牛久
 其尾
 其志
 貞音
 而受

ありら〜ゆ形を遠く山丘
花束 志坊 雲子
 うれ耳を〜もたぬ花や山嶺
 菊芽
 出づ幸候の言はれやうも〜
 柳牛
 骨折〜もぬくもわらぬ果〜
 何就
 いさよいやはた〜も〜
 枝雀
 庭を盡せぬも〜も〜
 万雄
 志解るも〜も〜
花音 山桂

早よい波浮舟を志又志
峰山 笑巴
 雁を〜も〜も〜
 柳園
 清〜の中〜に力や〜
 鯉尺
 也〜も〜も〜
 箕山
 極〜も〜も〜
 龜云
 暮入やちよ〜も〜
 和長
 旅か〜も〜も〜
 向富
 うつかりと柳〜も〜
 柳之
 みよ〜も〜も〜
 花石

七

小糸のれはゆりもきや 雲に 鬼明

きこひて一樹の影る小川水 井尻 折因

あまたれ戸の影るも 雲や梅の玉 一凡

橋乃人とも言流る蓮の心 心多

雲細や草舟 足とも雲と一折因 笑碎

あつたる花うきく 雲く橋の心 心流

ありぬくも思ひもあつたる情 鬼怒

あれやとれきも信せぬ心と云傳 折因

行まや給るまき石のまきて 重 存古

香久山にさる日也 香久山 石牙

かきのみ末と信守のま田の心 琴重

瀬所のりれ末をまきぬを心 万巻

知打乃まきと信守く 雲と心と云 心多

瀬伽河此流くまきや雲と心と 瑞山

谷川やどのとかりなる車 泰山

めく介もあつたる心とまきと心と 心流

本似咲て花の中一糸並川に於
 五日の中後摩本遠形野に
 持人よ寄る事一魚少くは波岸に
 傳と新人を日形や持乃篝
 芦北葉を植てくは登北やふり
 極白
 鷗文
 若人
 古古
 玉解

映ふ花を家くくは家あ名は
 吟和一りを家あくを万り取
 死ふいさく穢行の影魚をまかり
 八幡
 若年
 五七
 可虫

谷日や舟形とまあり北朝り山
 子福者とまきて通るやうそく
 宝澤のまふ尺布くは柳くま
 有るやうに北地くはくは穢心
 周の形もつるまはり色々の飯
 甚しく人ま向るやうま寺
 翠州や語乃を然然下りけ
 西保
 栞里
 佛凡
 可調
 九宰
 五牛
 如至
 内耕

多すも人まき寄る元北
 岩下
 里川

千石も有りやき〜 魚票

〜のちりやきありと並抽抄 列田 魚票

見留んとおてもおき〜 折東

茶まじり飲も後いと又気 白羊

系後れもありの〜 蓮のど 二吊 山

いづとま〜 帰るもあやき〜 曙白

あ〜〜 やまね直起れおの流 女 海鳥

山下飲系れり印中種さ〜 差合 お氏

よのさ〜 ぬ〜 ぬ〜 やき 楓花

唐狸〜 のお常存なり 魚一

漸〜 ぬ〜 ぬ〜 万力 夏書

匠毫〜 ぬ〜 ぬ〜 升家

屏の戸〜 ぬ〜 ぬ〜 青山

猫〜 ぬ〜 ぬ〜 国府 子英

月新〜 ぬ〜 ぬ〜 法目 白柳

ワ枝〜 ぬ〜 ぬ〜 竹居

か〜 ぬ〜 ぬ〜 曲射

うつくしと故ををゆるやうさの秋

丹内 権橋

万牛

けーのむちりや美のよ花あふ

社務 信翠

城の声もいつら止んで神ーくれ

花吸 赤谷

朝の起りもせき節ありきく

早帝 素流

源ーさや和のむらきき

堤 川口 吉備

三秋嘆や神胸のなれ喰おー

斗水

いけて垂菊や十りのさるもわけ

少匠 高舟

古和や鼻うさゆゆ標 まくら 谷村 梁父

老本粒喜れ色大き柳うれ

口津会 剛控

幣下粒も淋ーくらせん粒うら

何屋少

粒多啼やわつと自是にるれと

柳文

神収やまーくよれくまき神の糸

秋免

麻うられ笠履編む和や糸の多

赤城

けいけいよ魚もおとけく神水

大京山 重水

古屋斗れ粒うらさゆるひやう

古屋石 郭牙

そととの清きてしめや社宇
時のをくやうくしや夕
吹舟の影をうらや梅の影
徐風
は魚
其舟

おをさるるおれせもさるる田柳の
陳石

形をうらやけの柳やまをうら
清江

え能やむの影及よしや川
余法

屋雅の心まよしやうらや
浪石

うらやの影の影あはれたるむら
言園

おをさるるおれせもさるる田柳の
似鳩

おをさるるおれせもさるる田柳の
川明

おをさるるおれせもさるる田柳の
思存

おをさるるおれせもさるる田柳の
柳舟

おをさるるおれせもさるる田柳の
可水

おをさるるおれせもさるる田柳の
深翠

おをさるるおれせもさるる田柳の
戸計

おをさるるおれせもさるる田柳の
風山

よもぎ草を食むの地定りぬ
正香
庭の僧も唱ふわくく系橋水
版田
茂林
飛魚も走りて魚けを初鰓
桐江

朝起とあやう人も常らんうま
桐江
父影中津ふゆを夢作らぬ
嵐二
今来くは秋の暮るうまふし
仙橋

栽松辭

白明の海をきき今に秋をきき

ほれくち松おや一庭前より一本の松と
うら一植ふもはかりは時ふまふふ
わも誰もあつらふれあつらふ
友ときと松のおらう一よあつらふ見流
にま血いふは濼溪の池の蓮をわらふ
子戯う新れ井むあつらふふもふも
あおあおあつらふや月くれと松のさつら
いふとて道々おらふは松あつらふ
いふとて親くのあつらふとて松あつらふ

粗んも才か出まふはほほほほ
ひととあち〜〜〜はははは〜
又た〜〜〜

掃治此蒼き〜〜おれ松の月 又三升 秀外

朝音巾信〜〜〜尾 母屋の女度 悪花

あまのや末影母〜〜〜鳥 鳥兜

あまのや末影母〜〜〜下 船を

麻笈や吹あ〜〜〜の淋〜 鳥羽

秋の可成〜〜〜橋の〜 女 素琴

石臺に影ひの涼や〜〜〜也き

るりお人〜〜〜庭の〜 秋音

名月半映〜〜〜朝の〜 二五律 阿波

涼の涼〜〜〜白兒

いつ事〜〜〜白兒

あまのや〜〜〜何者

正橋を〜〜〜文其の杖を〜〜

わさくさくつて橋をた松極と橋を

ささねのいさくさくつてくさくた海 踏山

他日せくつてくさくた恩と

汗しゆる

わさくさくつて橋をた松極と橋を 踏山

おもしろくつて橋をた松極と橋を 桂仙

俯向てくさくたの橋をた松極と橋を 柳女

達へ忘や尾極をた松極と橋を 自轉

あつきのちくつて橋をた松極と橋を 美江

あつきのちくつて橋をた松極と橋を 素長

夕とや東をた松極と橋を 湖岸

取捨ひ子蟻も出たり夕とや 波山

系留乃葛糸のまのちくつて 百音

翁やさくつて橋をた松極と橋を 城麦

あつきのちくつて橋をた松極と橋を 席度

公のうけしるすて何し〜しるはれりや
おれり〜しるにやみり止〜る
人の口さ〜しるにやあらんからやと
おもひ給〜しるあれは〜しる痛〜しる
ものね〜しるまやあれは〜しる願〜しる
て〜しるあ〜しる〜しる〜しる
お乃れ〜しるや〜しる〜しる
あれは〜しる

手橋跡人
後水

大尾

梅〜しるあ〜しる〜しるのうらに
あ〜しる〜しる
あ〜しる〜しる
あ〜しる〜しる
あ〜しる〜しる
あ〜しる〜しる

炭焼かまよ城連て山のうら

古四序

善浦
松山守門忌

東都書林

本町三丁目

西村源六棹行



